

『日本薬局方』(15 改正) 収載漢薬の来源

小 曾 戸 洋

北里研究所東洋医学総合研究所

The History of Chinese Drugs Recorded in the
“Japanese Pharmacopoeia Fifteenth Edition”

Hiroshi Kosoto

*Oriental Medicine Research Center of the Kitasato Institute,
5-9-1 Shirogane, Minato-ku, Tokyo 108-8642, Japan*

(Received March 13, 2007)

Crude drugs are natural products which over the years of human experience have come to be regarded as medicine. Of course, if one does not understand their history, one cannot understand their significance as medicine. Since crude drugs exist because of the experience of human beings, the sciences of pharmacopoeia and natural products are inherently different. In the study of crude drugs it is therefore important to consider their history as well.

Since the middle of the 20th century, there have been a series of archaeological discoveries in China and Japan relating to traditional pharmacopoeia. These discoveries are important historical data, which provide reliable information about the origins of the pharmacopoeia. Regrettably however, this new knowledge, brought to light by these recent discoveries, is not reflected in the “Commentary of the Japanese Pharmacopoeia”.

This paper contains new knowledge about the 100 kinds of crude drugs listed in the “Japanese Pharmacopoeia Fifteenth Edition”.

Keywords: History of pharmacy; Chinese drugs; Japanese Pharmacopoeia; Shen-nong ben-cao jing

1. 緒 言

生薬は、人類の長年の経験によって薬物としての評価を与えられた天然物である。当然、その来歴（沿革・歴史）がわからなければ、その薬物としての意味はわからない。すなわち薬物たりえないということになる。生薬とは人間を主体とするものであり、その点において生薬学と天然物学とは本質的に異なる。生薬研究においてその来歴の検討が重要な意義をもち、漢薬研究にいまもって本草学が必須であるゆえんはここにある。

『日本薬局方解説』には従来「来歴」の項が設けられ、生薬に関しても解説がなされているが、東洋の医薬学史を専攻する筆者の観点からは、必ずしも射的を射ているとはいいたい記述が少なくないように思える。

漢薬の解説を中国医薬古典に依拠するにあたっては、さ

まざまの問題がある。たとえば、現今われわれの典拠としている『神農本草経』や『傷寒論』などの古典が旧来の記述を真に伝えているか。これには多くの疑点があり、古文獻学的知識に通じていなければ、これらを用いた解説など容易になしえないはずである。さらに、古典に記載される漢薬名と今日通用している生薬名が、はたして同一天然物を指しているのか、という名物同定はもっともやっかいな問題である。『神農本草経』収載品のうち今日の同定が正しいものは何割あるであろう。確証を欠き、断定しかねるものは少なくない。

例をとれば『日本薬局方解説』^{1,2)}の「サイコ BUPLEURI RADIX」の来歴の項に「神農本草経の上品に収録され、その薬能は……と記載され、また張元素は……と述べている」というが、『神農本草経』には「茈胡」が記載されている（いた）のであって、サイコ、いわんや BUPLEURI

RADIX が記載されているわけではない。両者が同一物である確証はなく、『神農本草経』^{3~6)}を持出すのであれば「茈胡と称される薬物は神農本草経の……に収録されており…」と書くほかないのである。ついでながら、ここに唐突に出典も示さず張元素を引用する意図も理解しかねる。張元素は何の本でそう述べているのか。典拠がない。そのうえ同定問題が曖昧なまま、古典を引用していくら薬能を論じてもしかたなかろう。

さて、近來(20世紀後半以降)、中国でも日本でも伝統薬物に関連する考古学的発見が相次いだ。これらは従来の伝世資料を時代的にはるかにさかのぼる現物(一次資料)であり、薬物の来源に関する確実な情報を提供してくれるわけがない史料である。その重要性について筆者はこれまで関連学会においていささか力説してきたつもりではあるが、遺憾ながらいまだにこれら新出土資料に着目し、生薬の来歴を再検討しようとする気運に乏しく、新知見による成果は『日本薬局方解説』にいささかも反映されていない。これを機会に少しでも斯界の注意を喚起することができれば幸である。

2. 主な出土資料

2.1 馬王堆漢墓医書⁷⁾および薬物一紀元前2世紀

1973年、湖南省の省都・長沙で、馬王堆漢墓が発掘された。紀元前2世紀前半のものである。一号墓・二号墓・三号墓の三つからなっていた。一号墓からは長沙王侯の妻の生々しいミイラが出てきた。手には死後の世界でも服用すべく漢方薬を握っていた。病理解剖によって生前のさまざまな既往歴もわかった。三号墓は息子の墓で、この人は医学と深いかわりがあったようである。14種類もの医学書が出土した。このうち漢薬の起源を探る上でもっとも貴重なのは薬物による処方集『五十二病方』である。約1万字近くから成る帛書で、52種の病気に対し、270余の処方を収載。約240種の薬物(生薬)が使われている。2000年以上の歳月を経た資料の損傷は激しく、中国側の研究発表には不備がある。筆者の研究室では先年その書物形態の復元に成功。中国を凌駕する研究成果をえた⁸⁾。

2.2 武威医簡ほか

武威医簡⁹⁾(紀元後1世紀)は1972年、甘肅省の武威県旱灘坡の漢墓から出土した木簡・木牘に書かれた医方集で、処方数は約30方、用いられる薬物は約100種。このほか、古いものでは1977年、安徽省阜陽で出土した木簡『万物』¹⁰⁾(紀元前2世紀)、あるいは敦煌漢簡(紀元後1~3世紀)や居延漢簡(紀元後1~3世紀)などがある¹¹⁾。また、器物としては、1968年、河北省滿城県の中山王墓(紀元前2世紀)から出土した製剤器具がある¹²⁾。

2.3 日本古代の医薬木簡—7~8世紀

従来、日本古代の医薬事情を示す現物としては、平安時代、8世紀半ばの正倉院薬物・種々薬帳しか知られなかったが^{13,14)}、近年、藤原京跡から多くの医薬関係木簡が出土した^{15~17)}。これらは大宝令施行下の現物で(飛鳥~奈良時

代、7~8世紀初)、多くの新知見が得られた。荷札・付札類には、麻黄・麻子・麦門冬・署預・龍骨・大黄・商陸・松羅・榆皮・芎藭・当帰・烏頭・桔梗・人參・五茄・懼麦・夜干・大戟・蛇床子・蛇蛻皮・地黄・白朮・独活・葛根・非子・知母・牛膝・杜仲・桃人・黑石英・石流黄などの薬物名が見え、処方書や薬物請求受領書の類にはこのほか、漏盧・升麻・黄芩・枳実・白朮、白微・芍薬・甘草・兎糸子・石斛・白芷・白蘗・桂心・茯苓・車前子・西辛・久参・王風行・防風などの薬物名が書かれている¹⁸⁾。

3. 具体例

以下に『第十五改正日本薬局方』収載の生薬から漢薬をいくつか選択し、筆者の来源に関する知見を提示する(漢薬名の来歴であって、基原物が同一であるかは別問題である)。また古来の和名についても『和名類聚抄』¹⁹⁾『本草和名』²⁰⁾『医心方』²¹⁾などの古文献による知見を付記する。なお、引用文献には初出の箇所にもみ成立年代や典拠を示した。

〔威靈仙〕六朝・唐の医方書では使われているが、本草書に立項したのは宋の『開宝本草』(973年成。『証類本草』引)から。従来、腰脚の冷痛を中心に用いられ、『唐本草』(『証類本草』引)では「腰腎・脚膝の積聚、腸内の諸冷」の痼疾に効くとし、『開宝本草』には「諸風、腹内冷痛、心膈痰水、久積・癥瘕、膀胱宿膿、腰膝冷疼、折傷」などの主治症があげられている。

〔茵陳蒿〕『神農本草経』(森立之本)上品に「茵陳蒿」の名称で収録。「風湿・寒熱の邪気の熱結、黄疸を治す」と記載されている。古くは「因塵蒿」「因陳」とも書かれた。蒿(よもぎ)に似ており、茎幹は冬を経ても枯れず、「陳(ふる)きに因」って春に再び新葉を生ずることからその名があるという。古方(『傷寒論』『金匱要略』)²²⁾以来、黄疸の要薬として用いられた。和名の「ひめよもぎ」は蟾艾(ひきよもぎ)の意。俗に「かわらよもぎ」「ねずみよもぎ」とも。

〔茴香〕『新修本草』(659年成。『証類本草』引)中品に「茴香(カイコウ)子」の名称で収録。「諸瘕・霍乱及び蛇傷を主る」と記されている。『開宝本草』に「一名茴香子」とある。茴香の称は北方人のもので、宋代からともいわれるが、唐以前の医方書中にも見えており、さらに3世紀の嵇康の詩『茴香賦』に「茴香の蒙楚の間に生ずるを見る」とあるから、相当古い。「かいこう」と読むのが本来の音であるが、日本では古来「ういきょう」の慣用音で通っている。

〔鬱金〕中国辺境民族の鬱人所用の物産とされ、中国古代から黄色染料・香料として用いられた。本草書では『新修本草』から収載。日本では『本草和名』から収録されている。漢名は本来は「うっこん」。

〔莖実〕『神農本草経』上品に収載。「癰疽・悪瘡、結肉・跌筋、敗瘡・熱氣、陰蝕の瘰癧を治し、関節を利す」と記されている。古方では用いられず、後世方でしばしば

配剤される。和名は「うはらのみ」、のち「いはら（いばら）」ともに棘刺があることから、「はら（ばら）」は針（はり）と同語源。薔薇（ショウビ）の訓（ばら）も同じ。

〔延胡索〕薬用として知られたのは唐代から。『開宝本草』に「破血、産後諸病、血によってなるところのもの、婦人月経不調、腹中結塊、崩中淋露、産後血運、暴血衝上、損（傷）による下血」と記されている。宋代以降の医方書にしばしば用いられるようになった。玄胡索とも書かれるが、これが本来で、延は宋帝の避諱字とする説もある。

〔黄耆〕馬王堆医書に「黄耆」「黄輿」「戴輿」と表記して薬用に供されている。『神農本草経』中品に収録され、「癰疽・久敗瘡を治す。排膿・止痛。大風・癩疾、五痔・鼠瘻。補虚。小兒百病」と記されている。古方では『金匱要略』に用いられている。「耆」は長・老の意。根が黄色ですこぶる長いことに由来する。和名は「やはらくさ」「かはらくさ」。前者は根が軟らかく綿のようであるから。

〔黄芩〕馬王堆医書・武威医簡・敦煌漢簡中の処方すでに用いられている。『神農本草経』中品に収録。「諸熱、黄疸、腸澼・泄利を治し、水を逐い、血閉を下す。惡瘡・疽蝕・火瘍」と記されている。古方以来、漢方方剤にしばしば配合。日本では飛鳥時代の木簡（藤原京跡出土）に「黄芩」が記され、平安時代には「ひひらぎ」「はいしば」と訓じられていたが、これは今のコガネバナとは別品で、実は柗（ひいらぎ）。その葉は有刺で「ひいらぎ（痛む）」から。柗は柗木に由来する。真種のコガネバナは享保年間に朝鮮からもたらされ栽培された。

〔黄精〕「女萎（萎蕤）」の類似品で、細部については古来諸説がある。『名医別録』（2～3世紀）上品に収録され、「中を補い気を益し、風湿を除き、五蔵を安んず」と記されている。和名は女萎と同じく「あまな」。また「おほえみ」「やまえみ」。女萎は丘陵原野に生じ、黄精は深山中に生じて女萎よりも茎葉根の形が大きいから。前者は俗称「あまところ」、後者は俗称「なるこゆり」にあてられる。

〔黄柏〕柏の字は本来、槩もしくは藁の字が用いられる。『神農本草経』中品に「藁木」の名称で収載。「五蔵・腸胃中の結熱気、黄疸・腸痔を治し、泄利、女子の漏下赤白・陰陽蝕瘡を止む」と記されている。古方では黄蘗を用いる処方が数方ある。和名の「きはだ」は黄色い肌（膚）の意。古来、黄色染料として汎用された。

〔黄连〕武威医簡の処方に用いられている。『神農本草経』中品に収録。「熱気、目痛・背傷・泣出を治す。明目。腸澼・腹痛・下利。陰中腫痛。久しく服せば人をして忘れざらしむ」と記されている。「黄」はいうまでもなくベルベリンの色（黄柏も同）。「連」は根が連珠のようだから（江蘇あたりの産品）。古方以来、漢方処方中にしばしば配合。和名は「かくまくさ」。崖間（がけま）草の意で、崖石の間に生ずることから。

〔遠志〕武威医簡の処方中に用いられている。『神農本草経』の上品に収載され、「欬逆・傷中を治し、不足を補い、邪気を除き、九竅を利し、智慧を益し、耳目聰明にして、

忘れず、志を強くし、力を倍す」と記されている。古方では用いられていないが、六朝時代以降の方書ではしばしば用いられる。日本には原産しないが、江戸時代に日本に真物がもたらされ、「ひめはぎ（姫萩）」と称された。

〔夏枯草〕『神農本草経』下品に収録され、「寒熱・瘰癧・鼠瘻・頭瘡を治し、癥を破り、瘰・結気・脚腫・湿痺を散ず」と記されている。和名は「うるい」「うるき」。俗に「うつぼぐさ（鞠草）」。一説に「じゅうにひとえ」を充てるが、誤りらしい。江戸後期に福建から舶載された夏枯草の鉢植品は日本の「うつぼぐさ」と同一品であったという。

〔何首烏〕本草書としては宋の『日華子本草』（10世紀後半。『証類本草』引）や『開宝本草』から収録され、前者には「久服すれば人をして子あらしめ、腹蔵の宿疾、一切の冷氣、及び腸風を治す」、後者には「瘰癧を主り、癰腫を消し、頭面の風瘡・五痔を療し、心痛を止め、血気を益し、髭鬚を黒くし、顔色を悦くし、久服すれば筋骨を長じ、精髓を益す。……また婦人産後、及び帯下諸湿を治す」と記されている。中唐以降、薬用に供されるようになったらしい。

〔莪朮〕『開宝本草』中品に「蓬莪茂（ほうがじゅつ）」（茂の読みはあるいは「しょく」）の名称で収録され、「心腹痛、中惡・疰忤・鬼氣、霍乱・冷氣、吐酸水、解毒、食飲不消を主る」と記されている。『薬性論』（7世紀。『証類本草』引）に「女子の血気心痛を治し、瘀癥・冷風を破る」、『日華子本草』に「一切の気を治し、胃を開き食を消し、月経を通じ、瘀血を消し、撲損痛・下血および内損・惡血等を止む」という。莪朮の称は明の『医学入門』（1575年成）²³⁾に見られる。後世方に用いられる。

〔葛根〕『神農本草経』中品に収載。「消渴・身大熱・嘔吐・諸痺を治し、陰気を起こし、諸毒を解す」と記されている。日本では飛鳥時代以前から食用・薬用とされており、和名は「くずのね」。「ぐず」は「かつら（葛）」の縮音。「かつら」は「懸（か）け連（つら）なる」に由来し、「つる（蔓）」も同語源。別説に「くず（くす）」は「くすり」の略とも。

〔栝楼仁・瓜呂根・天花粉〕『神農本草経』中品に「栝楼」が収録。「消渴、身熱・煩満、大熱を治し、虚を補い、中を安んじ、絶傷を続（つな）ぐ」と記されている。『爾雅』（紀元前3～2世紀）²⁴⁾に「果羸の実、栝楼」とあり、齊人はこれを「天瓜」と呼んだ。「栝楼」は木偏を草冠にして「苦蓼」とも書く。「瓜呂」は後世の略字で同一物。『神農本草経』の栝楼は根を薬用とし、「栝楼根（瓜呂根）」をいう。栝楼仁は元来「栝楼実」である。栝楼根・栝楼実ともに古方以来、漢方処方中に用いられる。天花は天瓜から転じたもので、天花粉は栝楼根の粉。和名は「からすうり（烏瓜）」。俗名は「きからすうり（黄烏瓜）」。

〔甘草〕馬王堆医書以来「甘草」の名で、漢方処方中に最も頻用される生薬。『神農本草経』上品に収載。「五蔵六府の寒熱邪氣を治し、筋骨を堅くし、肌肉を長じ、力を倍す。金創、腫（腫）。解毒」と記されている。甘味の強いことか

ら「蜜甘」「美草」の別称も、処方中であって守備の役目をする代表薬であることから「国老」の異称もある。日本では飛鳥時代から薬用に供されたが、国産せず、舶載品によった。和名は「あまき（甘木）」。

〔桔梗〕『神農本草経』中品に収載。「胸脇痛むこと刀刺するが如く、腹満して腸鳴すること幽々（おくふかいさま）、驚恐・悸気を治す」と記されている。「桔」も「梗」も直立する形状を意味するという。武威医簡・敦煌漢簡中の処方に配合。古方以来、しばしば用いられる。日本では飛鳥時代から薬用に供された。和名は「ありのひぶき」また「おかとどき」。ただし「ありのひぶき」は元来、沙参のことで、「蟻（あり）の欸冬（ふぶき）（小さい欸冬）」の意らしく、実は「おかとどき（山中の乳木）」が桔梗に相当するらしい。

〔菊花〕『神農本草経』上品に「菊華」として収録。「風頭・頭眩・腫痛、目の脱せんと欲し、涙出で、皮膚死肌、悪風・湿痺を治す」と記されている。和名は「かわらおはぎ」。ただし本来、菊は日本に自生せず、「きく」は中国音。「菊」と称し花がめでられるものはすべて漢種であるという。

〔枳実・陳皮・橘皮〕『神農本草経』上品に「橘柚」が収録。「一名橘皮。胸中の痼熱・逆気を治し、水穀を利す。久服すれば臭を去り、気を下す」と記されている。『呂氏春秋』（紀元前3世紀、『証類本草』唐本注引）に「江浦の橘と雲夢の柚がよい」とあり、「柚は橙で、大きいものが橘」（郭璞、4世紀初、『証類本草』唐本注引）、「小さいものが橘で、大きいものは柚」（孔安国、紀元前2～1世紀、『証類本草』唐本注引）などと古来諸説があり、橘柚は柑橘類の総称らしい。薬用部の果皮の紅色のものは橘紅とも称された。陶弘景（『本草経集注』、5～6世紀、『証類本草』引）以来、陳（ふる）いものが良質とされたことから橘柚（橘皮）は「陳橘皮」、また略して「陳皮」とも呼ばれた。別に『神農本草経』中品には「枳実」が収録。「大風の皮膚中にありて麻豆のごとく、痒に苦しむを治し、寒熱・熱結を除き、利を止め、筋肉を長じ、五蔵を利す」と記されている。枳実の大きいものは「枳殼」と称された。枳の和名は「からたち」。すなわち「からたちばな」の略で、中国の橘という意。

〔羌活・（独活）〕『神農本草経』上品に「独活」が収録。別名として「羌活」「羌青」「護羌使者」の称が記される。薬効は「風寒所撃、金創・止痛、賁豚、癰疽、女子疝瘕を治す」と記されている。独活は『金匱要略』の附方や六朝の医方書中に見えるが、羌活は古方では用いられない。唐代からは独活と羌活は区別されるようになったらしく、『新修本草』には「風を治すには独活、水を兼ねるものには羌活がよい」とあり、『日華子本草』には「独活は羌活の母の類」だという。羌はもと中国西部の民族名・地名。独活は日本では飛鳥時代から用いられている。和名は「うと（うど）」「つちたら」。「う」は「を」の転で山上（峯上）のこと。「と」は「たち」の縮音で、「うと」は「おたち（峯

立）」の意。山上の陽地に直立するからという。あるいは「埋（うづ）」の転（芽の土中にあるを食すから）とする説も。「たら」は「たら（たらのき）」のことで、葉が相似することから「つちたら（土櫓）」の称があるという。

〔杏仁〕『万物』には「杏覈」と書かれている。『神農本草経』下品に「杏核」として収載。「欬逆上気、雷鳴、喉痺を治し、気を下す。産乳、金創、寒心、賁豚」と記されている。『傷寒論』では「杏子」と称する。実（み）（中が実（じっ）している）のことを子ともいう。実の中が堅くて石のごときものを「覈（カク）」あるいは「核」という。核の柔軟で湿潤なものを「人」といい、北宋の『証類本草』からこれを「杏核人」と称するようになり、元明以降、「人」を「仁」に書き改め、ついに「杏仁」と表記するに至った。和名は「からもも」で、中国から伝わった桃の意。「あんず」は「杏子（アンズ）」から。「杏仁（アンニン）」の俗称も同様で、アンは唐音という。

〔枸杞〕『神農本草経』上品に収載。「五内の邪気、熱中・消渴、周痺を治す」と記されている。古方には配合されていないが、六朝時代以降、養生薬・強壮薬あるいは治療薬として用いられた。和名は「ぬみくすね」。「ぬみ」は「のみ（飲）」の転。「くすね」は「くすりのね（薬根）」の転で、飲薬の根の意かと思われる。

〔苦参〕武威医簡の処方に用いられている。『神農本草経』中品に収録。「心腹結気、癰疽・積聚、黄疸、溺余瀝あるを治し、水を逐い、癰腫を除き、中を補い、目を明らかにし、涙を止む」と記されている。根がすこぶる苦いことからこの薬名がある。古方では『金匱要略』の処方に用いられ、後世方に配剤される。日本でも飛鳥時代から使われ、「久参」とも表記されている。和名は「くらら」また「まひりくさ」。前者は苦味が強烈なために目が「くらくら」するから。後者は「めひりくさ」の訛で、目を洗うと目が「ひりひり」するからという。

〔荊芥〕『神農本草経』中品に「假蘇」の名称で収載。「寒熱・鼠瘻・癰瘕・生瘡を治す。結聚の気、これを破散し、瘀血を下し、湿痺を除く」と記されている。「荊芥」の薬名は『呉普本草』（3世紀、『証類本草』引）から。古方では用いられず、後世方にしばしば配剤される。和名は「いたちはぜ」あるいは「いたちくさ」。「いたち」とは似て非なるものの意。「はぜ」は俗にいう「はぜうるし」。

〔桂皮〕馬王堆医書や武威医簡などでは「桂」あるいは「困（キン）桂」と記され、『神農本草経』上品には「箇桂」「牡桂」の名で収載される。また旧来、医方書では「桂」「桂心」「肉桂」などと称して用いられる。『傷寒論』『金匱要略』では「桂枝」と称されるが、これは特殊な表現で、あるいは「支」と「皮」の字形の相似に由来する訛かとも思われる。日本では飛鳥時代から薬用に供されたが、国産せず、舶来品によった。

〔決明子〕『神農本草経』中品に「決明」として収録。「青盲、目淫膚・赤白膜、眼赤痛・涙出を治す」と記されている。通説ではこれは植物の馬蹄決明とされるが、実は本来、

決明は動物（貝類）の鮫魚（鮑魚、あわび・とこぶし）のことで、鮫魚（石決明）が『神農本草経』正品、馬蹄決明が『名医別録』副品であったものが、陶弘景『本草経集注』の時点で誤って逆転したものと考証される（森立之『本草経攷注』）。したがって『神農本草経』の決明は貝類、決明子はエビスグサの種子ということになる。

〔牽牛子〕牽牛は「けんぎゅう」と読むのが本来であるが、薬名では「けんご」が慣用。牛黄・牛旁・牛膝など、牛（ぎゅう）を牛（ご）と読むのは呉音ないしは日本古来の慣用音である。『名医別録』下品に収録され、「下気を主り、脚満水腫を治し、風毒を除き、小便を利す」と記されている。古方では用いられず、宋以後に瀉下薬として汎用されるようになった。和名は「あさかほ（朝顔）」。

〔紅花〕本草書としては『開宝本草』から「紅藍花」の名称で収載されたが、実は古くから染薬として用いられていた。中国には紀元前に西方から伝わり、日本へは6世紀頃に伝えられた。6世紀後半の藤ノ木古墳の石棺中からは大量の紅花の花粉が発見されている。和名は「くれのあい（呉藍）」で、中国伝来の染料という意。これで染めた色を「からくれない（韓紅）」という。7世紀以降、広く用いられ、江戸時代には諸国で栽培され、流通した。

〔香附子〕『名医別録』中品に「莎草根」の名称で収録され、「胸中の熱を除き、皮毛を充す」と記される。『新修本草』に「莎草の根は香附子という。根が附子のようなから、大いに気を下し、胸腹中の熱を除く」と述べられている。古方には用いられず、後世方中になじば用いられる。

〔厚朴〕武威医簡の処方に用いられている。『神農本草経』中品に収録。「中風・傷寒の頭痛、寒熱・驚気、血痺・死肌を治し、三虫を去る」と記されている。古方以来、漢方処方中になじば配合。朴とは木の皮のことで、この木の皮が厚いことからその名がある。和名は「ほほかしはのき」で、ホオノキはその略。「ほほ」は「火火」で赤色の意。若葉が紅色で、成長するにつれ櫛（かしわ）の葉に似るから。

〔牛黄〕『神農本草経』上品に収録。「驚癇、寒熱、熱盛・狂瘈を治し、邪を除き、鬼を逐う」と記されている。古方では使用されないが、中国では六朝以降の医方書中で用いられ、日本でも飛鳥時代より江戸時代に至るまで高貴薬（強心の万能薬）として珍重された。牛の胆石で、牛は古来ゴと読む。

〔牛膝〕馬王堆医書や武威医簡の処方に用いられている。茎に節があって牛の膝に似ているからその名があるという（陶弘景）。古来（六朝以降）雌雄の別があり、茎が紫のものを雄牛膝、白のものは雌牛膝とされる。『神農本草経』上品に収録。古方では用いられない。和名は「のくつち」また「つなぎくさ」。

〔呉茱萸〕元来は「朱臬」。のち両字に草冠を付して「茱萸」。『新修本草』から「呉茱萸」と称された。馬王堆医書・武威医簡ほかでも「朱臬」と記される。古方の原本でもそうであったろう。『神農本草経』中品に収録。「中を温め、気を下し、痛みを止む。欬逆・寒熱。湿・血痺を除き、風

邪を逐い、湊理を開く」と記されている。「朱臬」は二字とも同尾音の疊韻で、速音すれば「取」「聚」「集」「収」に通じ、収斂する意。味が辛辣なことから。「習々」や「椒」も同義に由来する。和名は「からはしかみ」。「から」は中国。「はしかみ」は椒の古名（山椒の項参照）。

〔牛蒡子〕『名医別録』に「惡実」の名称で収録され、「一名牛蒡、一名鼠黏草。明目、補中を主り、風傷を除く」と記されている。古方では用いられず、唐・宋以降の方剤に解熱・解毒目的や、咽喉痛・皮膚炎などの治療薬として配合される。

〔五味子〕『神農本草経』中品に「五味」で収載。「益気、欬逆上気、勞傷・羸瘦の不足を補う。陰を強くし、男子の精を益す」と記されている。多くの味を備えていることからその名がある。古方以来、漢方処方に用いられる。和名は「さねかづら」。「さね」はもと「さな」で、滑（なめ）りのこと。滑葛（なめりかつら）の意。俗に「美男葛（びなんかつら）」という。

〔柴胡〕もとは「茈胡」。武威医簡以来、処方に配合。『神農本草経』上品に「茈胡」で収録。「心腹を治し、腸胃中の結気・飲食積聚、寒熱邪気を去り、陳きを推して新しきを致す」と記されている。古方では少陽病治療の要薬とされる。和名は「のぜり」また「はまあかな」。基原植物には従来混乱があり、近來ミシマサイコがあてられているが、「はまあかな」の和名などから、考証学的には唐代以前の「茈胡」は今日のハマボウフウに相当するという説得力のある説がある（森立之『本草経攷注』）。

〔細辛〕馬王堆医書・武威医簡・敦煌漢簡中の処方に用いられている。『神農本草経』上品に収録。「欬逆、頭痛・腦動、百節拘攣、風湿痺痛・死肌を治す。目を明らかにし、九竅を利す」と記されている。古方以来、漢方処方中になじば用いられる。名の由来は、根が細く、味がきわめて辛いことから。本来、細辛は根を指し、その葉は杜薺と称されたが、のち両者は別基原とみなされるようになった。日本では飛鳥時代から用いられ「西辛」とも書かれた（藤原宮木簡）。平安時代には「みらのねくさ」また「ひきのひたひくさ」と訓じられた。前者は菰根草（にらのねくさ）の意で、菰根のように辛いことから。後者は蟾額草（ひきのひたいくさ）の意で、葉上に蟾額のごとき斑紋のあることから。

〔山梔子〕元来は「支子」と書かれた。あるいは「枝子」とも。支と卮は通用し、卮は丸い形をした器。「卮子」はその形状に由来する称。『神農本草経』中品に「枝子（もしくは支子）」として収録。「五内の邪気、胃中の熱気、面赤・酒皰皰鼻、白癩・赤癩・瘡瘍を治す」と記されている。『傷寒論』『金匱要略』では「梔子」とあるが、これは宋代に改められたもの。和名の「くちなし」は口無しのこと、実が熟しても口を開かないことから。古来、黄色の染料としても汎用された。

〔山茱萸〕武威医簡に「山朱臬」と表記して用いられている。『神農本草経』中品に収録。「心下の邪気・寒熱を治し、

中を温め、寒湿痺を逐い、三虫を去る」と記されている。「朱粳」の義についてはすでに呉茱萸の項に記した。和名は「いたちはしかみ」「かりはのみ」。俗に「やまぐみ」。日本では従来自生種があったが、享保7年(1722年)に朝鮮から贈られた7粒の種が栽培され、日本全国に広まったという。ほかに南京種があり、韓種(日本種も同様)に比して葉がやや狭く、実の肉が少ないという。

〔山椒〕元来、単に「椒」と称し、馬王堆医書ですでに薬用とされている。『神農本草経』下品には「蜀椒」の名で収録。「邪気欬逆を治し、中を温め、骨節皮膚の死肌、寒湿痺痛を逐い、気を下す」と記されている。蜀椒と称するのは秦椒に対してで、蜀国産のものは実が大きく良質だからという。古方でも蜀椒の名で用いられる。和名は「ふさはじかみ」「なるはじかみ」。「はじ」は実が「はじく」から。「かみ」は「かみら」で萑(にら)のように辛辣だから。「ふさ」は房。「なる」は実が成るからとされる。

〔酸棗仁〕馬王堆医書中に「酸棗」が薬用とされる。『神農本草経』上品にも「酸棗」で収録。「心腹の寒熱邪・結気、四肢の酸痛・湿痺を治す」と記されている。古方では『金匱要略』で酸棗仁が用いられているが「仁」の字は後世の付加であろう(処方名は酸棗湯)。元来は「酸棗」で、酸棗実が使用されたと思われる。和名は「すきなつめ」「さねふと」「おなつめ」。実が小さく、核が大きいことから。

〔山薬(薯蕷)〕『神農本草経』上品に「薯蕷(一名山芋)」で収録。「傷中を治し、虚羸を補い、寒熱の邪気を除き、中を補い気力を益し、肌肉を長ず」と記されている。「薯蕷」とも書き、古くは「諸蕷」(『山海経』紀元前)²⁵⁾とも。豊韻による名称で、根の形が長く屈曲して不定だから。『金匱要略』では「薯蕷」となっているが、草冠が付されたのは後世になってから。日本でも飛鳥時代の本簡に「薯蕷」と記され、薬用とされた。和名は「やまついも」で山芋(やまのいも)の意。従来、栽培品は「ながいも」と称され、薬用には向かないとされた。別名の山薬(サンヤク)は宋の『本草衍義』(1116年成)²⁶⁾以降。

〔地黄〕『神農本草経』上品に「乾地黄」で収録。「折跌・絶筋・傷中を治し、血痺を逐い、骨髓を填(みた)し、肌肉を長ず。湯と作(な)せば、寒熱・積聚を除き、痺を除く。生(なま)はもっともよし」と記されている。古方以来、補剤の要薬として用いられる。日本では飛鳥時代から薬用とされたが、国産せず、舶載品によった。中世に種が伝えられ栽培されるようになり、俗に「さおひめ」と呼ばれた。佐保姫(さおひめ)は春をつかさどる女神で、春に可愛らしい紅色の花をつけることにちなむ。

〔紫根〕紫草の根。紫草は古くは「苳」「苳草」とも称された。『神農本草経』中品に収録。「心腹の邪気、五疸を治し、中を補い気を益し、九竅を利し、水道を通ず」と記されている。古来、紫色の染料として、また薬物として利用された。天智天皇7年(668年)、大海人皇子と額田女王の間に交わされた薬獵りの歌は有名で、「むらさき」と呼ばれた。

〔蒺藜子〕本来は「疾黎」。馬王堆医書でもその字で使われている。『神農本草経』上品に「蒺藜子(原本では疾黎か)」で収録。「惡血を治し、癥結・積聚を破る。喉痺・乳難」と記されている。「疾黎」の縮音は「茨(シ・いばら)」に通じ、種子は三角で菱のごとく、刺があるから。古来、兵家ではこれを真似ていわゆる「まきびし」を製造した。「屈人」「止行」の異名があるのも同様の由来。和名は「はまひし」。海浜の砂地に生じ、菱に似るから。

〔芍薬〕馬王堆医書や武威医簡など、古くから薬用とされたが、元来「芍」は「勺(のちに「夕」とも)」、「薬」は「楽」と書いた。「勺」「楽(爍)」はいずれも音は「シャク」で、花の色が明るく光り輝くさまに由来する。「薬」も「シャク」と読めば熱いという意。『神農本草経』中品でも「勺薬」として収録。「邪気・腹痛を治し、血痺を除き、堅積・寒熱・疝疝を破り、痛みを止め、小便を利し、気を益す」と記されている。日本では飛鳥時代から薬用に供されたが(藤原京本簡や『医心方』などでも「勺薬」)、国産せず、舶載品によった。和名は「えびすくすり」「えびす」は外国産の意。

〔蛇床子〕武威医簡に「蛇床子」と書かれ用いられているが、蛇と蛇は同字。『神農本草経』上品に「蛇牀子」として収録。「婦人の陰中腫痛、男子の陰痿湿痒を治し、痺を除き、関節を利す。癰癤・惡瘡」と記されている。牀と床も同字。古方では『金匱要略』の処方に配合。日本では飛鳥時代から薬用とされる。和名は「ひるむしろ」また「はませり」。

〔車前子〕馬王堆医書に「車踐」「車𦍋」の名で薬用。正名は「茅苢」(『詩経』紀元前)。昔の別称は「馬舄(ばせき)」「当道」。いずれも人馬・車の通る道端に好んで生ずるから。「子」は実(み)(種子)。車前子は車前実ともいう。車前草は全草。車前子(車前実)は『神農本草経』上品に収録。「気癢を治し、痛を止め、水道・小便を利し、湿痺を除く」と記されている。古方には用いられず、六朝以降の処方にしばしば配剤。日本でも古く藤原京本簡中の処方に配合。和名は「おおはこ」。母子草(ははこくさ)に似て、大きいことに由来するらしい。

〔十薬〕『名医別録』下品に「葢(シュウ)」の名で収録。現代中国では「魚腥草」の名で通用するが、これは南宋の『履巉岩本草』(1220年成)²⁷⁾に由来するらしい。和名は古くは「しぶき」。古来、民間薬的に毒瘡に用いられた。近世から「どくだみ」と称されたが毒痛(どくのいたみ)の意か。十薬とは十種の薬能があるからとされるが重薬ともかく。あるいは「葢薬(シュウヤク)」からの転訛か。

〔縮砂〕『開宝本草』中品に「縮砂蜜」の名称で収録され、「虚勞、冷瀉、宿食不消、赤白洩痢、腹中虚痛を主り、気を下す」と記されている。宋元以降の医方書中で、脾胃(胃腸)を安和にする目的、とくに止瀉を目標に配剤されている。

〔朮〕朮は後世、白朮・蒼朮の別があるが、少なくとも漢代までは「朮」という薬名で用いられていた。馬王堆医

書・武威医簡・居延漢簡の処方に朮が配合されている。『神農本草經』上品でも朮の称で収録。「風寒湿痺・死肌、瘰・疽を治す。汗を止め、熱を除き、食を消す」と記されている。現行の『傷寒論』『金匱要略』では朮はすべて白朮となっているが、これは北宋の林億らによる校刊の際、白の字が付加されたもので、本来は朮であったことは明白。林億ら校刊『備急千金要方』（1066年刊）の巻首「新校備急千金要方例」に「如白朮一物，古書惟只言朮。近代医家咸以朮為蒼朮。今則加以白字」とある。白朮・蒼朮の区別は六朝時代以降のことで、単に朮といえば蒼朮を指したらしい（宋代は別）。古方でいう白朮（朮）は今の蒼朮に相当すると考えられる。和名は「おけら」。古来、朮には「避邪悪鬼」の効があるとされ、これを焼いて鬼を避ける神事が行われた。「おけら」は「鬼消ゆる」の転とする説がある。

〔生薑〕「薑」は中国古典にしばしば記載がある。馬王堆医書では「滕」「疆」の文字が使われている。「生」はなま（非乾燥品）の意。元来乾燥品は「乾薑」と称し、『神農本草經』中品に収録。「胸満・欬逆上気を治し、中を温め、血を止め、汗を出し、風湿痺を逐う。腸瀉下利。生のものは尤（もっと）も良し。久服すれば臭気を去り、神明に通ず」と記されている。和名は「くれのはじかみ」「くれ（呉）」は中国産の意。「はじかみ」はもと枳（椒）のことで、ともに味が辛辣であることから、のちに薑に転用され、椒は「山椒（さんしょう）」と称して区別されるようになった。「薑」を「姜」と書くは後世の俗用。

〔小豆蔻・草豆蔻〕草豆蔻は本来、単に「豆蔻」と称され、『名医別録』上品に収録。「中を温め、心腹痛・嘔吐を治し、口臭気を去る」と記されている。『薬性論』に「草豆蔻は単味で用いてよし一切の冷氣を主る」といい、『開宝本草』は「従来いう豆蔻は草豆蔻のことで、気を下し、霍乱を止める」といっている。小豆蔻は漢方薬ではなく、もとインドの生薬で、ヨーロッパに香料料としてもたらされ、近代、豆蔻の類似物としてその漢字名が与えられたもの。

〔升麻〕『神農本草經』上品に収録。「百毒を解し、百精の老物・殃鬼を殺し、温疫・鄣邪・蠱毒を辟く」と記されている。古方以来、漢方処方に用いられる。日本でも飛鳥時代から薬用に供される。和名は「とりのあしくさ」また「うたかくさ」。

〔辛夷〕『神農本草經』上品に収録。「五蔵身体の寒風、風頭・脳痛、面黧を治す」と記されている。古くは戦国時代の『楚辞（離騷）』（『本草經集注』引）に記載がある。馬王堆漢墓からはモクレンの花蕾の現物が出土した。古方では用いられないが、六朝唐代には「辛夷人」として処方に配剤。和名は「やまあらさき」。

〔石膏〕馬王堆医書・武威医簡・古方以来、薬用に供される。『神農本草經』中品に収録。「中風・寒熱、心下逆気・驚喘、口乾・舌焦して息する能わず、腹中堅痛するを治す。邪気を除く。産乳、金創」と記されている。和名は「しらしい（白石）」。

〔川芎〕武威医簡では「弓窮」の名称で処方に配合。『神

農本草經』中品に「芎藭」（もと弓窮か）で収録。「中風脳に入りて頭痛し、また寒痺・攣緩急、金創、婦人の血閉・無子を治す」と記されている。古方では『金匱要略』に「芎藭」の称で配剤。日本では飛鳥時代から薬用に供された（芎藭）。和名は「おんなかつらくさ」。茎葉が柔軟で、蔓生に似ることから。

〔蟾酥〕『神農本草經』下品に「蝦蟆（ガマ）」が収録。「邪気を治し、癰堅・血を破る。癰腫・陰瘡。これを服せば熱病を患わず」と記されている。蝦蟆と蟾蜍（センジョ）が同一物か否かは説が分かれるが、一類のものであろう。蝦蟆（蟾蜍）全体は古くから薬用とされた。酥（脂・毒性分泌物、ガマの油）が用いられたのは唐以降のことらしい。西洋でも早くからその薬効が知られていたという。和名は「ひき」また「かえる」。前者は食虫するのに気を引き込むように口に入れるから。後者は諸説があるが、おたまじゃくしから変じて（かえって）成体になることに由来するといわれる。

〔桑白皮〕『神農本草經』中品に「桑根白皮」の名で収録。「傷中・五労・六極・羸瘦、崩中・脈絶を治し、虚を補い気を益す」と記されている。古方では『金匱要略』に桑東南根の白皮が配剤。和名は「くはのかは」「くはのねのかは」。桑は根皮以外にも古くから薬用とされ、馬王堆医書では「桑汁」「桑枝」が使われている。

〔大黃〕武威医簡の処方に配合。『神農本草經』下品に収録。「瘀血・血閉を下す。寒熱、癰瘕・積聚を破る。留飲・宿食。腸胃を蕩滌し、陳きを推して新しきを致し、水穀を通利し、中を調え食を化し、五蔵を安和す」と記されている。「將軍」の威名をとり、古方以来用いられた実熱瀉剤の要薬。日本では飛鳥時代から用いられている。和名の「おほし」は本来、羊蹄のことで、大黃も同様に根茎・花葉が巨大であることから（多（おほ）し、大きい意）。

〔大棗〕古くは馬王堆医書などで単に「棗」（あるいは肥棗・美棗・棗種・棗脂・棗膏など）として使用。『神農本草經』上品に大棗の名で収録。「心腹の邪気を治し、中を安んじ脾を養い、十二経を助け、胃気を平（たいら）かにし、九竅を通じ、少気小津・身中不足を補う。大驚。四肢重。百薬を和す」と記されている。和名は「おほなつめ」「なつめ」は夏芽で、夏にようやく芽が出ることに由来する。

〔沢瀉〕馬王堆医書や武威医簡に「沢舄」として薬用。『神農本草經』上品にも「沢舄」として収録。「風寒湿痺、乳難を治し、水を消す。五蔵を養い、力を益し、肥健す」と記されている。古方以来、方剤に配合。舄の正字は舄（かさぎ）。水沢に生じ、鵲（かさぎ）の姿に似るから。「水舄」ともいう。和名は「なまい」「おもだか」。俗に「さじおもだか」「なまい」は「ぬまい」の転で沼に生ずるから。「おもだか」は面高で、葉面の紋脈が高起していることにちなむ。「さじ」は匙で、葉尖が丸くて匙に似ることから。

〔知母〕『神農本草經』中品に収録。「消渴・熱中を治し、邪気を除く。肢体の浮腫、水を下し、不足を補い、気を益す」と記されている。古方以来、日本でも飛鳥時代以来、

薬用とされる。和名は「やまところ」また「やまし」。俗称「やますげ」「からすすげ」がこれにあてられた。

〔**丁香**〕漢方医薬書では一般に「丁香」と記される。『開宝本草』上品に収録。「脾胃を温め、霍乱・擁脹・風毒・諸腫・歯疳撃を止む。よく諸香を発す。」と記されている。丁香（丁子）は丁子香の略で、丁の字に似ているから（『齊民要術』。6世紀。『証類本草』雞舌香条引）。六朝～唐の文献に散見する「雞舌香」は丁香に同定される（宋・沈括説）。日本への渡来は奈良時代以前。法隆寺薬物や正倉院薬物に現物がある。内服よりも香薬・防虫薬として使用されたりしい。

〔**釣藤**〕『名医別録』中品に収録。「小児の寒熱・十二驚癇を治す」と記されている。宋以降の医方書に用いられる。和名は「かきかつら」。漢名・和名ともに、この植物に側枝の変態した釣刺があることに由来する。現代中国では「釣藤（コウトウ）」と表記している。

〔**猪苓**〕『神農本草経』中品に収録。「痃瘕を治し、毒・蠱注の不祥なるを解き、水道を利す」と記されている。猪（勢）は豚。苓は零で矢（屎・糞）の意。古方以来、利尿を主目的に用いられる。和名は「かしはき」「くぬ」「やまかしは」。いずれも櫛や櫟の樹下に生じる菌であることから。

〔**天麻・赤箭**〕天麻の薬名は『雷公炮炙論』（5世紀。『証類本草』引）が初出。唐の『薬性論』に「赤箭脂の別名は天麻」とある。宋の『夢溪筆談』（11世紀後半）²⁸⁾にも「赤箭とは今の天麻のこと」という。宋の『開宝本草』で赤箭と天麻を別に立項したり、『本草衍義』に「赤箭は苗（幼茎）、天麻は根」というのは誤解で、本来、赤箭と天麻は異名同品らしい。赤箭は『神農本草経』上品に収録。「鬼精物を殺し、蠱毒・悪気を治す。久服すれば気力を益し、陰を長じ、肥健す」と記されている。赤箭・天麻は古方には用いられない。和名は「おとおとし」また「かみのや」。前者は若芽が軟弱で、成長しても独茎で大枝葉がなく、枯れてもなお若茎のようだから。後者は神の矢のことで、鬼箭（おにのやがら）の義。

〔**天門冬**〕馬王堆医書の『養生方』や、武威医簡には「門冬」の名称で用いられている。「門冬」とは鬚のこと。「顛棘之門冬」（逆刺のある門冬）から「天門冬」と称されるようになった。『神農本草経』の上品に収録され、「一名顛棘（顛棘に通じる）、諸の暴風湿・偏痺を治し、骨髓を強くし、三虫を殺し、伏尸を去る」と記されている。古方では『傷寒論』の麻黄升麻湯に配合され、「去心」を指示される。後世方では肺腎の虚熱を清する目的で用いる。

〔**当帰**〕武威医簡や敦煌漢簡の処方に配合。『神農本草経』中品に収録。「欬逆上気、温瘡寒熱の洗々として皮膚中にあり、また婦人の漏下・絶子、諸悪瘡瘍、金創を治す」と記されている。古方以来、とくに婦人病の要薬とされる。日本では飛鳥時代から薬用。和名は「やませり」「うませり」「おほせり」「かわさく」。「やませり」は山芹。「うませり」「おほせり」はともに大芹の意。「かわさく」は不詳。

〔**桃仁**〕元来は「桃核」「桃覈」と書いた。『神農本草経』

下品に「桃核」で収載。「瘀血・血閉癥、邪気を治し、小虫を殺す」と記されている。後漢以降は「桃人」とも称し、宋の『証類本草』では「桃核仁」「桃仁」と書くのは元明以降。桃の和名「もも」は百の訓に由来し、実が多く成ることから。藤原京木簡でも「桃人」と記している。

〔**杜仲**〕武威医簡の処方に配合。『神農本草経』上品に収録。「腰脊痛を治し、中を補い、精気を益し、筋骨を強くし、志を強め、陰下痒湿・小便余瀝を除く」と記されている。「杜中」とも書かれた。日本では飛鳥時代から薬用。和名は「まゆみ」「はひまゆみ」。前者は「真弓（檀）」で直立するもの。後者は「這真弓（這檀）」で彎曲するものという。俗称「まさき（柁）」に同定された。

〔**人參**〕『神農本草経』上品に収録。「五蔵を補うを主り、精神を安んじ、魂魄を定め、驚悸を止め、邪気を除き、目を明らかにし、心を開き、智を益す。久服すれば身を軽くし、年を延ばす」と記されている。本来は「人蔘」と書いたらしいが、武威医簡・敦煌漢簡や、現伝の医薬古典ではみな「人參（蔘）」となっているから、『傷寒論』原書でもすでに蔘の字が用いられていたと思われる。日本では飛鳥時代から薬用に供されており、和名は「かのにけくさ（鹿乃通草）」。「鹿が人参の生えている場所に連れて行ってくれ、さっといなくなったという故事にちなむらしい。また熊胆の和名と同じく「くまのい」とも。これは国産の人参（直根・竹節人参）に強い苦味があることに由来するという。

〔**忍冬**〕『名医別録』上品に収録。「寒熱、身腫」の薬効が記されている。藤生で、冬を経ても枯れぬことからこの名があるという（陶弘景）。和名は「すいかずら」。水辺に生じ、「（水を）吸う蔓（かづら）」を語源とするらしい。民間薬としてよく用いられる。

〔**貝母**〕『神農本草経』中品に収録。「傷寒・煩熱・淋瀝・邪気、疝瘕、喉痺、乳難、金創・風癰を治す」と記されている。前漢の木簡（紀元前2世紀『万物』）にも寒熱の治療薬として見える。貝子（子安貝）の集合した形に似ることからその名があるという（陶弘景）。和名は「ははくり」。「ははこゆり」の転訛とする説がある。古方では白散（桔梗白散）に用いる。

〔**麦門冬**〕『神農本草経』上品に収録。「心腹結気し、傷中傷飽（胃腸障害）し、胃の絡脈絶し、羸瘦・短気するを治す」と記されている。門冬とは鬚のことで、苗が麦に似ており、天門冬（顛棘の門冬）と区別して名づけられたという。古方以来用いられる。日本では飛鳥時代から。和名は「やますげ（山菅）」で、大葉の鹿葱（『本草拾遺』。8世紀前半。『証類本草』引）に相当。俗に「やぶらん（藪蘭）」。「小葉のものは「りゅうのひげ（ジャノヒゲ）」。

〔**薄荷**〕中国本草では唐の『新修本草』（中品）から記載され、「賊風・傷寒を主る。発汗。悪気、心腹脹満、霍乱、宿食不消。下気」と記されている。唐代から医方書の処方中にも配合されるようになり（蕃荷・荊荷・薄揣）、後世処方に配剤された。中近世に日本へも伝えられ、栽培が行わ

れるようになった。

〔半夏〕馬王堆医書・武威医簡・敦煌漢簡などの処方に配合。『神農本草經』下品に収録。「傷寒寒熱，心下堅を治す。気を下す。喉咽腫痛，頭眩・胸脹，欬逆・腸鳴。汗を止む」と記されている。古方以来の要薬。和名は「ほそくみ」。『臍（ほぞ）の実』の意で，球形の中に臍に似た凹みがあるから，俗に「からすのひしゃく」「へほそ」。前者は「烏の柄杓」で，花の形が匙のようだから。

〔白芷〕古くは「白芷」。馬王堆医書や武威医簡にその薬名で配剤。あるいは「蘭芷」とも。『神農本草經』中品に収載。「女人漏下赤白，血閉陰腫，寒熱，風頭侵目淚出，長肌膚潤澤を主り，面脂（顔へ塗るクリーム）を作る」と記されている。歴代の医方書中で用いられるが，古方では使用されない。和名は「かさもち」「さわうと」「よろひくさ」。「かさもち」は笠持で，茎頭につける花が笠の形に似るから。「さわうと」は沢に生ずるうど。「よろひくさ」は鎧（甲（よろい））草で，葉が平に敷かれて甲衣状だから。

〔枇杷葉〕『名医別録』の中品に収載され，「卒嘔（急性の嘔吐）の止まざるを主り，気を下す」と記されている。名の由来は葉の形が楽器の琵琶（枇杷・批把とも書く）に似るから。旧来，葉の細毛は除去して用いるよう指示されている。唐・宋の医方書にしばしば用いられ，日本では江戸中後期にこれを主薬とした暑気払いの枇杷葉湯が京都で売られた。

〔檳榔子〕『名医別録』中品に「檳榔」の名称で収録され，「穀を消し，水を逐い，痰を除き，三虫・伏尸を癰殺し，寸白を治す」と記されている。陶弘景は「3～4種あって，交州産は形が小さくて味が甘く，広州以南のものは形が大きくて渋い。核の大きなものは猪檳榔という。みな薬用となる。小さいものは南方人は内蘗子と称し，俗に檳榔孫とっている。これも食用になる」という。果皮を大腹皮と称することがある。

〔茯苓〕馬王堆医書に「伏露（霊）」「服零」「伏兔」「備零」の称で薬用。『神農本草經』上品に「茯苓」で収載。「胸脇逆気，憂恚・驚邪・恐悸，心下結痛，寒熱・煩満・欬逆を治し，口焦・舌乾を止め，小便を利す」と記されている。古方以来，利水の要薬。苓は本来，零に作り，矢（尿）の意。猪苓も同。日本では飛鳥時代から薬用。和名は「まつほと」。「まつ」は松。「ほと」はふぐり（陰囊）。

〔附子・烏頭〕附子はトリカブトの側根，烏頭は主根。猛毒。洋の東西を問わず紀元前から毒薬として，また治療薬として用いられた。中国では紀元前から「葷」「烏喙」「天雄」と称され，馬王堆医書では烏喙の名で，武威医簡・居延漢簡・敦煌漢簡などでは烏喙・天雄の名で治療薬として配合。『神農本草經』下品には天雄・烏頭・附子の3品が収載。「大風・寒湿痺・歴節痛・拘攣緩急・積聚・金創・中風・欬逆上気・癰瘡・皰瘡」などに対する効能が記されている。古方では『傷寒論』に附子，『金匱要略』に附子・烏頭・天雄が配剤。和名は「おう」。日本では飛鳥時代から薬用とされた。

〔防已〕『神農本草經』下品に収録。「風寒・温瘡・熱気，諸癰を治し，邪を除き，大小便を利す」と記されている。古来，木防已と漢防已の2種があるとされる。古方では『金匱要略』に「防已」「木防已」が配剤。和名は「あおかつら」。茎葉ともに青いから，俗称「つづらふじ」が漢防已，「おおつづらふじ（つたのはかつら）」が木防已だと考証される。「つづら（綴葛・つづかつら）」は多生して「つづらおり（葛折・九折坂・羊腸坂）」のようだから。近世から中国では「防己（ボウキ）」と表記されるが，本来は「防己（ボウイ）」（ないしは防已。己と巳は元来同字か）。防も巳も葉名で，同音義に由来するらしい。

〔茅根〕馬王堆医書に「茅」。『神農本草經』中品に「茅根」で収録。「労傷・虚羸を治し，中を補い気を益す。瘀血・血閉・寒熱を除き，小便を利す」と記されている。茅の和名は「ち」。茅根は「ちのね」。「ち」は小さいの義。「ちがや」は小さい菅（かや）の意。

〔防風〕馬王堆医書では「方風」「房風」，武威医簡では「方風」と表記。いずれも風病治療の要薬であることに由来する。『神農本草經』中品に収載。「大風・頭眩痛，悪風・風邪，目盲（くら）くして見る所なく，風周身を行（めぐ）り，骨節疼痛し，煩満するを治す」と記されている。古方では用いられない。日本では飛鳥時代から薬用。和名は「はますがな」「はまにがな」。ただし，六朝以前の古本草にいう「防風」は今の茴香，古本草の「茈胡（柴胡）」が今の防風で，六朝以前の医方書においてもこれに従うべきであり，「防風」が今の防風になったのは唐以降のことであると説（森立之）があり，その可能性は高い。茴香（茴草・回草）に相当する藜香子（『本草和名』）の和名は「くれのおも」であるが，これは「呉（中国）の御物（おもの・御膳薬）」（舶来の食菜）に由来するという。

〔牡丹皮〕「牡丹」は武威医簡の処方に配合。『神農本草經』下品に収載。「寒熱中風，癰癰瘰，驚癰邪気を治し，癰堅瘀血，留舍腸胃を除き，五蔵を安じ，癰瘡を療す」と記されている。根皮を用いることから，『金匱要略』などでは牡丹皮もしくは牡丹去心と表記される。和名は「ふかみくさ」また「やまたちばな」。前者は山深きところに生えるから。後者は山中に生じて花が橘花に似るから。

〔牡蠣〕本来は「牡蠣」と書き，馬王堆医書中にすでに治療薬として用いられている。『神農本草經』上品に収録され，「傷寒の寒熱，温瘡洒洒，驚志・怒気を治し，拘緩・鼠瘻，女子の帯下赤白を除く」と記されている。古方以来，漢方処方中に用いられる。和名は「おかきのかい」「かき」。貝が多数集団で塊をなしており，これを掻き取って分けることから。

〔麻黄〕武威医簡以来，薬用。『神農本草經』中品に収載。「中風・傷寒・頭痛，温瘡を治す。表を発し，汗を出し，邪熱の気を去り，欬逆上気を止め，寒熱を除き，癰堅・積聚を破る」と記されている。日本では舶載品が飛鳥時代から用いられた。和名は「かずねくさ（数根草）」あるいは「あまな（甘菜）」とされるが，国産しないから，すぎな（杉菜）

から転用されたものらしい。

〔麻子仁〕『神農本草経』上品に「麻蕒」の名で収載。「七傷を治し、五蔵を利す。下血・寒氣、多食すれば人をして鬼を見狂走せしむ。……麻子は中を補し、氣を益す」と記されている。これ（一名麻勃）は花と萼を合せたものを指すらしい。種子は「麻子」。古方で「麻子仁」と書かれるが、元来は「麻子」。日本では飛鳥時代から薬用に供されている。

〔木通〕『神農本草経』中品に「通草」の名称で収載され、「悪虫を去り、脾胃の寒熱を除き、九竅・血脈・関節を通利し、人をして忘れざらしむ」と記されている。古方では当帰四逆湯・当帰四逆加呉茱萸生薑湯のみに配合。後世方ではしばしば用いられる。和名は「あけび」「あけびかつら」。「あけび」は「あかつび」の転で、実が熟して割裂した状が女陰に似ているから（「つび」は女陰のこと）。「赤女」とも書いた。

〔木香〕『神農本草経』の上品に収載され、「邪氣を治し、毒・疫・温・鬼を辟け、志を強くし、淋露を治す。久服すれば夢寤・魘寐せず」という。古来「青木香」と称された（陶弘景）。古方では用いられない。唐・宋以降の方剤にしばしば配合される。

〔益智〕「益智子（ヤクチシ、エキチシとも）」は六朝～唐からその効用が知られていたが、正統本草に立項されたのは宋の『開宝本草』から。同書に「遺精・虚漏、小便余瀝を主り、氣を益し、神（精神）を安んじ、不足を補い、三焦を安んじ、諸氣を調う」と記載されている。古方では用いられず、唐・宋以降の方剤に配合される。薬名の由来は文字どおり「智を益す」意から。

〔薏苡仁〕『神農本草経』上品に「薏苡子」の名称で収録。「筋急拘攣して屈伸するべからず、風湿痺を治す。氣を下す」と記されている。薏苡（ジュズダマはその母種）の種子。『説文解字』（1世紀）²⁹⁾に「苡苡は薏苡ともいう」とあり、薏は苡の字の訛。薏（意）も苡（以）も、苡（以の古字）に由来。すなわち薏も苡も元来苡で、種子の連なった象形と考証される。この中国中原産品は小顆であったが、後漢代には馬援によって南方から実の大きな種（いわゆる鬼数珠玉）がもたらされ、以後二種が知られた。享保中に中国から舶載され日本で繁殖したものは中国原産の真種で、小顆、色は青味があり、甘味という。和名は「つづたま（数珠玉）」。今日いうハトムギが南方種の鬼数珠玉に相当する。古方では『金匱要略』で配剤されるが、仁の字はもと子で、宋代以降に改変されたもの。

〔竜骨〕武威医簡以来、薬用。『神農本草経』上品に収録。「心腹の鬼注、精物の老魅、欬逆、泄利・膿血、女下の漏下、癥瘕・堅結、小児の熱氣・驚癇を治す」と記されている。古方にも配剤される。和名は「たつのほね」。飛鳥時代から用いられたが、中国からの輸入品によったらしい。

〔竜胆〕『神農本草経』上品に収載。「骨間の寒熱、驚癇の邪氣を治し、絶傷を続（つな）ぎ、五蔵を定め、蠱毒を殺す」と記されている。この名称は、竜の徳に託し、胆のよ

うに苦味が強く、かつ胆の治療に効果のあることに由来するらしい。和名は「えやみくさ」「にがな」。前者は瘡（おこり・えやみ）の治療に効があるから、後者は苦菜、俗称「りんどう」は竜胆の音からの変化（りゅうたん→りんどう）。

〔良薑〕本来の名称は「高良薑」で、のち略して良薑とも称されるようになった。高良薑は『名医別録』の中品で、「暴冷・胃中の冷逆、霍乱・腹痛を主る」と記されている。「高良」は原産の地名、「薑」は葉が生薑に似るからという（陶弘景）。馬王堆漢墓からは現在の高良薑に相当する実物の生薬が出土している。

〔連翹〕『神農本草経』下品に収載。「寒熱・鼠瘻・癰瘰・癰腫・惡瘡・癰瘤・結熱・蠱毒を治す」と記されている。『傷寒論』では「連翹」の名称で用いられる。和名は「いたちはぜ」あるいは「いたちくさ」。「いたち」とは似て非なるものの意。「はぜ」は俗にいう「はぜうし」。

〔萇若〕『史記』倉公伝（紀元前2世紀）³⁰⁾中にすでにこれを用いた治療例が記されている。『神農本草経』下品に「萇藟子」の名称で収録。「齒痛・出虫、肉痺拘急を治す。人をして健行させ、鬼を見せしむ。多食すれば人をして狂走せしむ」と記されている。和名は「おほみるくさ」「おほみくさ」。いずれも「鬼を見る草」の変化らしい。本来はシナヒヨスを指したものであろうが、中国・日本では従来、近縁のハシリドコロ（トコロは草の名、狂走させる草という意）、ダツラ（曼陀羅華・朝鮮朝顔）、ペラドンナなどにも当てられたことがある。ロートコンは萇若根から。

4. 結 語

以上、生薬研究における来歴の重要性、漢薬の基源を探る上で出土資料のもつ意義について説き、主な出土資料を紹介し、いくつかの具体例を述べた。

このような来歴・基原の研究にあたっては、現時点、もてる資料（史料）を駆使して、どこまで研究が可能であり、どこまでが曖昧なのかの限界を明らかにすることがまず前提といえよう。伝統医学や和漢薬については科学化、科学的究明が叫ばれながらも、こと斯界における古文書の扱われ方はおおかた非科学的といわざるをえないのが現状である。それはこの分野における古文書の専門学者がいないことに起因する。はじめに述べたように、来歴が不明では、生薬は生薬たりえない。今後この分野への理解が広まり深まり、優れた後進が育ってくれることを願ってやまない。

本稿は日本生薬学会第53回年会（2006年9月30日、於：埼玉）における特別講演Ⅱ「漢薬の起源—出土資料から」の講演内容をまとめたものである。筆者に講演を指名下さり、お世話いただいた木村孟淳年会長はじめ関係の先生方に深謝の意を表します。

文 献

- 1) 日本公定書協会監修、第十二改正日本薬局方解説書、東京、

- 1991, p. D-340.
- 2) 日本薬局方解説書編集委員会編, 第十五改正日本薬局方解説書, 東京, 2006, p. D-269.
- 3) 森立之編, 神農本草經, 江戸, 1854.
- 4) 森立之, 本草經攷注, 江戸, 1857.
- 5) 曹孝忠ら, 重修政和經史証類本草備用本草, 平陽, 1249.
- 6) 艾晟ら, 經史証類大觀本草, 武昌, 1904.
- 7) 小曾戸洋, 漢方の歴史, 東京, 1999, pp. 20-30.
- 8) 小曾戸洋ら, 馬王堆出土文献訳注叢書・五十二病方, 東京, 2007.
- 9) 甘肅省博物館・武威県文化館編, 武威漢代医簡, 北京, 1975.
- 10) 文化部古文書研究室・安徽阜陽地区博物館阜陽漢簡整理組, 阜陽漢簡『万物』, 文物, 1988年, 4号, pp. 36-54.
- 11) 張顕成, 簡帛藥名研究, 四川, 1997.
- 12) 小曾戸洋, 漢方の歴史, 東京, 1999, pp. 30-34.
- 13) 朝比奈泰彦編, 正倉院薬物, 大阪, 1955.
- 14) 宮内庁正倉院事務所編, 図説正倉院薬物, 東京, 2000.
- 15) 奈良県教育委員会編, 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告, 第25冊, 藤原宮, 奈良, 1969.
- 16) 日本医史学会編, 図録日本医事文化資料集成, 第1巻, 東京, 1978, pp. 25-32.
- 17) 奈良国立文化財研究所編, 飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(9), 奈良, 1989.
- 18) 丸山裕美子, 日本古代の医療制度, 東京, 1998, pp. 83-102.
- 19) 源順, 狩谷夜被斎箋注, 箋注和名類聚抄, 東京, 1883.
- 20) 深根輔仁, 本草和名, 江戸影古鈔本, 1860.
- 21) 丹波康頼, 医心方, 平安古鈔本, 11世紀.
- 22) 小曾戸洋, 中国医学古典と日本, 東京, 1996, pp. 265-310.
- 23) 李梴, 医学入門, 南豊, 1575, 巻2, 本草, 治湿門.
- 24) 著者不詳, 郭璞注, 爾雅, 宋刊本, 巻下, 枳草.
- 25) 著者不詳, 郭璞注, 山海經伝, 宋刊本(古逸叢書三編之四), 巻3に1回, 巻5に4回所出.
- 26) 寇宗奭, 本草衍義, 武昌, 1910, 巻7.
- 27) 王介, 履巉岩本草, 1220, 明抄絵本, 鄭金生『履巉岩本草』初考, 浙江中医雜誌, 1980年, 8月号, p. 339.
- 28) 沈括, 夢溪筆談, 明刊本, 巻26, 藥議.
- 29) 許慎, 説文解字(徐鉉本), 清刊本(孫星衍), 巻1下.
- 30) 司馬遷, 史記, 宋刊本(南化本), 巻105.